

# 第1回「土曜日における地域での体験活動等の在り方」分科会 概要

## 1 日 時

平成23年9月2日（金） 9：30～11：00

## 2 場 所

福利厚生センター3F 第5会議室

## 3 出席者

委員 築山分科会長、太田委員、東委員、木原委員、難波委員（メンバー）  
小田垣委員、松本委員（準メンバー）

### ■分科会の検討内容及び進め方について

資料1により、事務局から「土曜日を活用した教育の在り方」の検討理念を説明するとともに、分科会の検討内容及び進め方について提案し、了承。

### ■検討の論点について

資料2により、本分科会で検討する論点について事務局から提案し、了承を得た。  
第1回分科会で個々の論点について意見交換することとされた。

### ■意見交換・協議

## <地域における体験活動等の充実について>

### ○体験活動の必要性・検討の方向性

- ◇ 単に、子どもたちが参加できるようにどのような工夫が出来るかというだけの検討ではなく、これまでの取組を総括した上で、子どもたちが本来、身につける力を体験活動を通じて身につけさせるという観点から、参加者の向上を検討していくべきである。
- ◇ 地域の子ども祭りなどに子どもが参加しているが、子どもがお客さんになっている。これでは駄目である。子どもが主体的に参画できる取組にすることが必要である。
- ◇ 小学校高学年や中学段階では、子どもたちが体験活動に参加して楽しかったというだけでは、駄目である。例えば、地域に何かを返すんだということが実感できる取組が必要である。そのためには、子どもが主体的に取組にかかわることが必要である。
- ◇ 10年前は、地域の体験活動に子どもたちが受動的に参加する取組が多くあったが、最近では、地域でのボランティア活動への参加が実施されている。子どもの発達段階に応じて、子どもたちが主体的に参加し、地域にどう貢献するのか、地域（社会）をどう支えていくのかを考えさせるような取組にする必要がある。
- ◇ 子どもの頃からスポーツ（体験活動）をしている人は、社会人になっても、協調性がある人間になっていると感じる。一方で、全くスポーツ（体験活動）をしていない人は、協調性があまりない大人になっているように感じる。
- ◇ 府立高校では、全ての学校ではないが、土曜日に開放講座を実施している。その中で、例えば、地域の小学校と春や秋に、高校生が理科の実験や和歌などの指導を行う取組をしている。

## ○子どもたちの参加向上に向けた工夫

- ◇ アンケート結果でも、小学校低学年の子どもがいる家庭では、参加したいという思いがある家庭があった。小学校低学年では子どもだけで参加することは難しく、親と一緒に参加できる体験活動を充実させることが必要である。
- ◇ 中学校段階では、多くの生徒が部活動をしているため、地域の活動に参加できない状況がある。一方で、クラブ活動を通じた子どもたちの人間関係は強い。ここでは、学校の協力を得て、例えば、クラブ活動や生徒会などを通じて参加を打診し、はじめはある程度強制的に参加させる必要があると考える。
- ◇ 前任校では、地域の運動会などがあるときには、部活動を休みにして、中学生を参加させていた。運動会に限らず、小学校での餅つき大会への参加や、敬老会で中学生の演舞会を行うなど、地域の活動に中学生も参加することにより、取組に活力が生まれる。そのような経験することは生徒にとってもメリットがあり、また、学校への信頼も高まる。生徒と地域のつながりができ、また学校と地域のつながりもできる。中学校も部活動単位でも生徒を参加させることが重要である。
- ◇ 障害があるなど特に支援が必要な子どもたちも参加できるようにするためには、開催場所や内容の工夫、支援員の充実などが必要である。

## ○体験活動を通じた家庭教育への支援

- ◇ 小学校低学年の子どもがいる家庭では、親と一緒に体験活動に参加することで、地域の子どものことがわかり、また、親同士のつながりも出来るのではないかと。しかし、中学の年代の子どもに対しては、親として子どもに関わるのが難しい時期であると言える。このような時期には、地域の人々の支えが必要になる。
- ◇ 子どもが小さい頃は、子ども中心に土曜日を過ごしている方が多いが、子どもが中学生以上になると、土曜日に暇をもてあましている親も多いと感じる。そのような親を活用した取組を行うことで、中学生の子どもをもつ家庭に支援できないか。

## <地域と学校が連携した取組の強化>

- ◇ 学校と地域が連携した取組として、中学校でコミュニティースクールに取り組んでいる。当初は、生徒指導上の課題をなんとかしたいという思いからはじめたものである。親も子どもと同じように、学校に来てもらうことが必要だという思いから、親が地域の人から学ぶシニアスクールに取り組んでおり、学校で花壇をつくるなどの活動をされている。このような取組を通じて、地域の人々の学校に対する理解が深まると同時に、生徒の側からも何か出来ることはないか、何かを返そうという取組が芽生えてきている。
- ◇ 学校と地域が連携した取組を行うためには、地域の人々の側にも学校にも何か得るものがあることが必要である。
- ◇ 私がかかわっている学校では、少年非行を何とかしようという思いが学校だけでなく保護者にもあったので、PTA等で取組を続けている。取組を継続したものにするためには、学校や地域、保護者に何のために取組をするのかという共通理解が必要である。その上で、役割分担や仕組みが出来てくると思われる。
- ◇ 学校と地域の人々の共通理解を図るためには、接点を充実させることが必要である。例えば、運動会に保護者や地域の人々を呼ぶだけでなく、土曜日に運動会を行い準備から地域の人々に参加してもらうなどの工夫で、接点は作れるのではないかと。
- ◇ 約3分の1の子どもたちが土曜日に地域での体験活動や部活動などを行わず、無為に過ごしており、学校週5日制の導入の趣旨から取り残されている実態がある。これらの

子どもたちに対する支援が必要である。

- ◇ スポーツ少年団の中には、地域や学校の活動に参加することよりも、少年団の活動を重視する指導者も多い。地域のスポーツ活動の指導者であるとともに、地域の教育者であるという意識を持ってもらえるような取組も必要であると感じる。

---

## ■ 今後の検討に向けて

---

十分に意見交換できなかった論点2について、次回の分科会で意見交換を行うとともに、論点1及び3について、今回各委員から出された観点を含め、事務局で「課題に対する対応（案）」をまとめ、次回の分科会で対応案をもとに、更に検討を深めることとされた。